



よりよい世界のために

富山県立大門高等学校 2年 橋本 彩花

私はこれまで、世界に目を向け世界規模の問題を自分で考えたことはあっただろうか。ニュースの流し見や学校で講師の方を招いての講義を聞いて感想を書くなど世界に目を向ける機会はたくさんあった。しかし、ニュースや講義などもその場限りで世界の抱えている問題を自分で見つけ、自分なりの考えを持ち人に伝えたことはいままでにない。グローバル化の進んだこれからの社会を生きていく上で世界に目を向けずに生きていくわけにはいかない。そう思い、ニュースを自分から興味を持って見た。

今年1945年8月15日に第2次世界大戦が終結してから70年という節目の年の終戦記念日である。戦争の悲惨さや被害の大きさは小学校の頃から、実際に戦争を体験した方からお話を聞いたり1年ごとにテレビで組まれる戦争の特集を見たりして知っている。その番組の中で、戦争によって身体も心深く傷ついた人々が口々に言う。「戦争は二度と繰り返してはならないものだ。」と。その言葉たちの中に、私はある矛盾を見つけた。それは「戦争というものを子供の世代にも伝えていかねばならない。」というものと「子供たちには平和な世界を残していきたい。」というものだ。二つ目の言葉は悲痛な面持ちで話していることから戦争というものがあったという事実すら伝えたくないと思っているように見えた。この「戦争があったこととその内容を伝えるべき」と「伝えない方がよい」という意見はどちらの方がよいのか。私なりに考えてみた結果は、どちらでもよいのではないかということだ。戦争を体験しどの国も違いはあれど被害があり、大変だと伝えられているはずである。戦争の伝える伝えないがどちらでもよいとは体験していないから言えることだと言われれば確かにそうである。実際に体験した方に失礼だとも思うが、戦争を体験していないという人が多いことは世界で見ても同じことだ。損害が大きかった国は言うまでもなく、利益があった国にも被害は出ていて戦争については伝えられているはずだ。戦争を体験した方の平均年齢がついに80歳を超え、戦争の悲惨さを伝える方が減少している今でも、進んでまた戦争をしたいと考えている国はないだろう。戦争が起きても仕方がないと少しでも思っている国や、戦争によって利益があった国でも、戦争をせずに解決する方法があればそちらを選ぶであろう。どこの国民であろうと戦争は伝えられ想像するのみだろうが、そうであるからこそ自分が体験したことのない痛みがある戦争を恐れ、避けたいと思うのではないだろうか。だから、これからは過去を振り返り戦争を恐れながら各国と交渉していくのではなく、ご先祖様の勇気に感謝しつつ各国と友好な関係を築くべきである。これは言うだけであれば簡単そうに聞こえるが、実際は途方もなく難しいことだ。これは政治に関わっている人たちだけでなく、全国民の意志も関わってくるからである。国民が友好的でなくては国同士が仲良く出来るわけがない。どこの国にも友好的な人、ある国には友好的でまたある国にはそうではない人、どこの国にも友好的ではない人、世界にはたくさんの方がいる。それを理解した上であの国は昔、私たちの国に酷いことをしたからと無条件に嫌うのではなく、まずはその先入観を捨てることが大事だ。そしていろいろな国の文化を知り、お互いに理解し合うことも大事である。

これらが高校生の私たちに出来る最低限のことである。誰かがそうするのを待ち、見るのではなくまさに自分自身が踏み出し、歩み寄ること。それが出来たのであればもう既によりよい世界をつくる事が出来るのではないだろうか。